

essais こころみ 2019年4月

2019年4月1日（月） 朝のうちは晴れ、新元号発表「令和」、『堀田善衛全集』見なおす試み  
堀田善衛全集（筑摩書房 1974年6月20日発刊開始）



2019年4月1日（月） 晴れから曇り

新年度が始まり、新元号がさきほど発表された。ラジオとスマホでNHKの中継を聴いて、みていた。さすがにドキドキした。歴史の大事な瞬間に立つ合っているという感覚。まもなく、「令和」の始り。

一 堀田善衛全集を見なす試み（始）一 晩年のスタイル

新元号「令和」。昭和、平成、令和と、まさか3代生きることになるうとは。「令和」発表の歴史的瞬間に立ち合えたのは、自分史的にも貴重なトピック。さて、令和のいつの段階でこの世をさることになるだろう。

そんなことを考える年令にもなるから、ずいぶん前から年に一度のペースでその時々にあるものを「始末」してきた。予定では昨年末に書棚に眠ったままの全集を処分するつもりだった。

そのタイミングをのがして、今年に入ってまもなく、そうだ、読んでいけばいいじゃないか、この世を後にする時まで。そう思いついた。処分のタイミングをのがしたのも、それでいいのだろうかという思いがどこかにあった。

全集は3種類あって、古典文学全集はほぼ手つかず。これは読めるかどうか自信はない。ともあれ、若い時に何かの思いにかられて買った全集を、うんと大人になった晩年に読みなおすのもいい。

まさかこんなことを思いつくとは。でも、考えてみれば、自然の中を散歩するのが唯一の趣味といえば趣味、堀田善衛全集を見なおすのもそれに通じるものがある。知の森の散歩をしよう。

2019年4月3日（水） クレオ大阪中央館すぐそばのお寺の境内から外へのびる桜



2019年4月5日（金） 晴れ、桜満開

今朝ぐっと日の出がはやくなった気がした。さすが「清明」。どうやら今日と明日が絶好の桜見日和。それでも当分名所にはいけない。人の異常な多さを想像するだけで気がうせる。当所前のJR西日本本社ビルにある小さな園庭。高くのびる数本の桜で満足するでしょう。

#### － 堀田善衛全集を見なおす（1）－ よい本を読むとき

2年前に『私の日本語雑記』（中井久夫 岩波書店）を読んだとき、不思議な感覚をおぼえた。それは精神に栄養がいきわたったような、若き繊細さを呼び覚まされたような、かつての時空間に入り込んだような。

その感覚を人に話した時は短絡的に、「自分が賢くなったように感じる本、著者はすごい」と言った。言いながらそれでは不十分と感じていた。

今回何十年ぶりかで堀田善衛全集第一巻を開き、しばらく全体をなぞり、付録についていた三作家による寄稿文を読み、最初の章の「詩編」の第一詩を2, 3度読みかえして、ひと呼吸いれたとき、ふと、2年前のあの感覚がよぎった。

第一巻の一番最初に載っている作品・詩は、『今宵何を語らう……』。季節は花の散る、晩春。むすびの部分だけでも紹介しよう。

散る花の、散りぎはの一声の叫び。それはかつて私の嘆きであった。

だが散るがままにまかせるがいい。花のねがひは叶えられたのだ。誰も見ずとも、忘れさらられても、夢のやうにも。

澄みきった月にむかひ、今宵私は何を語らう。

ふいをつく花冷えの空気が心身をひとめぐりした感じだ。日々のわずかな時間でも全集を見なおしていくのは、想定外に意外に、日常を豊かにするかもしれない。

2019年4月14日（日） 曇のち雨

小ぶりの雨。春らしい。桜の花びらがアスファルトに散らばる。新緑も芽吹いて、刻々と終りと始りの時に近づく。今月下旬から来月上旬は世の中小休止状態と考えてよさそう。オフィシャルな仕事は早めに済ませておくのがベター。

－ 堀田善衛全集を見なおす（2）－ ひとつの共通項

数年前に気づいたこと、なぜか共通するのがフランス文学。気にいった本の著者のプロフィールを確認すると、専攻がフランス文学だったということが多い。

小説は若い頃に読んだ。海外の作品の方が多かったが、アメリカ文学はまったく手にしなかった。どうしてだったろう、理由さえ覚えていない。自分に合わないと感じていた気がする。

「堀田善衛」が「モンテーニュ」について書いていたことは知らなかった。あとになって『モンテーニュ』（荒木昭太郎 2000年）でハマるのに、『ミッシェル城館の人』の発行が1991年だったからだと思う。

1991年は独立した年で、以降数年はそれまでとはまったく違う分野の本を読んだ。その末に原点回帰は必然なのか、『モンテーニュ』は2001年に読んだ時よりまして親しみ、「堀田善衛」をこうして今の日常に自然に甦る。

全集第2巻の解説は「埴谷雄高」が書いている。短い文章であるからなおさら「埴谷雄高」の眼力と〈腕〉が光る。いつのまにか文の世界に入っていて、はっとする。付箋を8カ所もつけた。

その一つは同時代の作家たちにふれた箇所だけど、それはわたしがなぜかフランス文学を専攻する人と合う理由でもあるように感じた。

「（略）私達も、眼を近づけて精査していけば、これほど多様な陰翳をもっているのかと驚かされるほど互いにかけ離れた差異をもっているけれども、しかしたとえその根本的な資質が大きく異なっているとしても、私達すべての脳裡深くひとつの共通項が「なっている」。

2019年4月18日（木） 晴れ

今日は春コートもいらぬ。すっきり晴れて、暖かい。そろそろ躑躅の蕾が植垣に見え始めた。御堂筋のイチョウがうっすら黄緑がかった。もみじはそうそうに新緑がたなびく。季節は晩春から初夏へ。

－ 堀田善衛全集を見なおす（3）－ 信じることは

ノートルダム大聖堂火災のニュースはラジオで最初に聞いた。なんで?!、小さなショック。工事中だったとそうで、原因はタバコの不始末ではないか。いずれせよ、なんともやりきれない。

ハードもソフトも文化遺産は人間の生の微細な営みの象徴的記号。貴賤の別なく、喜怒哀楽の熾烈、苛烈なたたかひの途上で時空に刻むその証。後世の人が頼る知の集積。

「堀田善衛」もまたその一人。第一巻の詩篇を読みながら、まるで昨夜その書く姿をみたように、見えてくる。誰のことをうたったのか、解説にもなかったある詩人への『挽歌』。

自問自答のような『明るく歌のやうに』。最後の部分が気にとまる。

「移りゆく あの空とこの空のいりまじるそのなかで  
僕は信じる 自然のやうな歳月を  
空よ もうおまへは僕の外にはない  
さうして僕のどこに内があったらう

なにかが僕のすぐそばで 身を傾けて  
言っている 信じることは聞くことだ  
何気なく立っている 樹々の凜とした姿よ  
いつ樹々が寂寥を言ったらう」

「信じることは聞くことだ」、これは何をさしているのだろう。自分を信じるためには、自分に聞いてみる、問うということだろうか。文学的感性の乏しさがここで露呈。

文才のある人は書物に遺るが、書物にならない人の方が圧倒的に多い。その人を知る人が文化遺産の代わりになると言えるが、それはほんの一端。当事者の中に遺り、そのままになる。

昨日久しぶりに会った人に出版を勧めた。伝統的な技法を現代のライフスタイルに合わせて独自のメソッドを構築しつつあった。本にすればたっくさんの人に役立ててもらえる、一つの文化遺産になる。